

はじめに

学校臨床総合教育研究センター長 汐見稔幸

東京大学大学院教育学研究科附属学校臨床総合教育研究センターの年報『ネットワーク』の第6号を発刊いたします。

本研究センターの年報のタイトルが『ネットワーク』となっているのは、この研究科に課せられた課題を象徴しています。どこの大学あるいは大学院でもそうだと思いますが、研究が発展し次第に専門化していきまると、だんだん研究者相互の交流が限定されるようになり、ときにはタコツボ化していきます。タコツボ化していきまると、他者からの評価や批判を日常的には意識しなくてすみますので、不要な緊張からは解放されますし、またそのことによってかえって鋭い掘削作業的な研究が進む可能性があります。しかし、たいていそこに重大な落とし穴がまちうけています。

研究がある程度進展していきまると、主だった研究テーマがほぼ出し尽くされ、やがて重箱の隅をつつくような研究になっていきがちです。この時期には、定説がたくさんでき、その分野の学問が体系化され、大学では概論が講義されるようになります。概論は、その分野の学問の基本的な成果が出そろって、それらを体系化することがある程度可能になったときに生まれますが、当初は概論は一つでなく、諸概論間の葛藤がみられます。しかしやがて概論自身が絞られ定説化していくことになります。そうしてその学問は安定するわけですが、しかしそうになると、その学問の新たでラディカルな発展が難しくなります。現実といきいきした格闘を通じて新たな方法を開拓し、学問そのものを創造する、そうした意気込みが次第に失せて、定式化された方法に厳密にそっているかどうか、定説をふまえているかどうか、等々の学問的権威がその分野にお

おいかぶさってきがちだからです。そうになるとその学問は、現実とのいきいきとした接点を失うことになりがちですし、学問としての有効性を社会や歴史が評価するという当たり前の視点が曖昧になり、学問内部で自己循環する性格を強めます。

研究は、専門性を高めようとすれば狭くテーマを限定した方がよいのですが、それが逆にタコツボ化を生み出す土壌になります。そうなったときには学問自体が硬直化していく可能性が高くなります。そこで、それを避けるさまざまな工夫が必要になります。その一つは、テーマを共有しながら、それぞれの専門性を生かして協働するということです。大学の内部でコースや旧講座を超えて協働するということは、それほどやさしいことではありませんが、あえてそれに挑む姿勢が要求されるわけです。もうひとつは、大学がその学問のよってたつ社会的基盤と独自に接点を持ち、専門性を生かしつつ、その基盤の現場と協働する可能性を追求することだと思われれます。それらによって、他の専門分野と交流する機会が拡大されるだけでなく、自らの学問の有効性自体を相対化し、また自らの専門分野に他の方法を導入する契機が増大します。そのことによって、その学問全体の再活性化を期待するのです。

本センターは、そうした期待と目論見をもって創設された機関です。教育学研究科内部の各セクションをつなげ、教育学研究科と教育の現場とをつなげるという二重のつなげによって、現場の抱える問題にこれまででは見えなかった照明をあて、それによってこれまでとは異なる解明の方策を追究し、合わせて教育学という学問と教育学部自体のあり方の再検討の機会を拡

大していこうとしているのです。そのねらいをひとことと言うと「ネットワーキング」となるでしょう。本誌のタイトルが『ネットワーク』となっている所以です。

本年度から3年間は、「学習環境改善のための学校支援システムの比較調査および開発研究」という共同研究プロジェクトが研究テーマになります。今学校という現場では、学力「低下」問題へのとりくみや総合的学習の展開などという学力問題への新たな取り組みだけでなく、不登校問題や生徒の人間関係のもつれへの支援、崩壊クラスへのサポートなど、次々と新たなテーマに取り組まなければならなくなってきました。学校の地域開放も現実的なテーマですし、カリキュラムの自主編成もやがて各校の課題になるでしょう。学校経営・運営の新たな展開がテーマになってきているということです。それを、経

験に頼らざるをえない面がある学校の教師と校長・教頭だけで担えるかということが当然問題になります。

本年度からの研究テーマは、そうしたことに鑑みて、〈学校支援〉ということ 키워ドに選びました。大学という専門機関が現場をどうサポートできるのか、そして現場によって大学はどう活性化されるのか、その可能性を探ることを試みます。ネットワーキングからコラボレーションへというのが課題です。研究は日本をフィールドとするグループと外国をフィールドとするグループに分かれ、また平行して行われているCOE研究とも協同しながら、多くの学校現場の協力を得て行われています。本報告書はその第一報です。

お読みになって忌憚のないご意見をいただければ幸甚です。